



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

ものは神の性質なのか：
スピノザ形而上学における内属論解釈を検討するた
めに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2014-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏葉, 武秀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4814

ものは神の性質なのか

——スピノザ形而上学における内属論解釈を検討するために——

柏葉武秀

Are Things Properties of God?

——Towards an Examination of Inherence Interpretation of Spinoza's Metaphysics——

Takehide KASHIWABA

はじめに

スピノザは様態を「実体の変様あるいは、他のものうちにあり他のものによって考えられるもの」と定義している (E1Def5)。この定義が17世紀近世哲学以前の伝統的な用語法に基づいているとするならば、様態は実体の性質あるいは状態と受け取るのは自然である。というのも、様態とは文法上述語に相当し、たとえば「この机は白い」という文では主語たる「机」が実体(基体)であり「白」が様態になるからである。だが、他方でスピノザは様態を一般的な物理的個物であるとも述べている (E1P25C, E2Def1)。しかし、たとえ「自らのうちにあり、それ自身によって考えられるものである」実体が神と同一視されるとはいえ (E1Def3, Def6)、物体が実体の性質であるとはいかにも奇妙ではないか。それどころか、人間の身体もまた物体であるのだから、人間は神=実体の性質にすぎないというのだろうか。このような様態論への批判は、ドイツ観念論陣営の哲学史上有名な論難を筆頭に、スピノザ批判の典型であり、スピノザ擁護者との論争はいまだ継続中である。

様態を実体の性質と捉えるテキストの読みに対して、体系的な批判を加え、スピノザのテキスト全体により整合的な解釈を提出したのはカーリーであった。カーリーの解釈は実体と様態とを因果的な関係にあるとする「因果論解釈」である。40年以上前に出されたこの提案は英語圏のスピノザ研究者に好意的に受容され大きな影響を及ぼしてきたといえるが、近年重大な挑戦を受けている。それは様態を実体の性質とみなす読みの復権である。この潮流を「内属論解釈」と呼んでおく。本論の目的は、実体-様態関係をめぐる因果論解釈に対する内属論解釈からの批判を検討することにある。スピノザ形而上学全体に内属論解釈を貫徹しようとするときに、引き受けざるをえない課題をあぶり出すためである。もとより、スピノザにかぎらず哲学の古典の一言一句に至るまで、いっさいの齟齬やときには矛盾をも抱え込まないテキスト解釈などは望みようもない。むしろ本論では、内属論解釈への内在的批判というよりは問題提起をすることになるだろう。実質は英語圏スピノザ研究のサーベイに近いものとなるはずである。

本論ではまずカーリーの因果論解釈をとりあげ、その強みを確認する。とカーリー批判者の

内属論解釈との論争を整理する (1)。その後、カーリー批判者の内属論解釈との論争を整理する。その上で、因果性をどのように読み解くかをめぐって、内属論解釈が直面する課題を指摘する (2)。最後に内属論解釈の先駆であり今なお代表でもあるベネットの「場の形而上学」をとりあげながら、現代分析形而上学の一元論を背景にすると両者がどのように分類されるかを確かめておく。ベネットの解釈がはらむ両義性を押さえながら、場の形而上学が「無世界論」に陥るのを回避するための方策をさぐってみたい (3)。

1

因果論解釈と内属論解釈の論争は、『エチカ』のいずれも重要な二つの定理を軸に闘われている。

「存在するものはすべて神のうちにある (in Deo est)。そしていかなるものも神なしには存在しえないし、また考えられることもない」(E1P15)

「神の本性の必然性から、無限に多くのものが (すなわち、無限知性によって捉えることのできるすべてのものが)、無限に多くの仕方では生じてこなければならない」(E1P16)

内属論解釈の支持者は第一部定理15を主たる根拠としてテキストを読み込んでいき、他方因果論解釈に説得力を覚えるものは定理16を強調した読みに近づく。先に引用した様態の定義と相まって、定理15を様態の実体への内属関係を表現している定理だと読むことは、字面だけを追うならば当を得ているようにみえる。定理16からはその帰結として、神は「あらゆるものの作用原因 (causa efficiens)」(P16C1) であることが導かれており、スピノザが実体と様態とを因果関係において把握しているとみなすのは当然であるだろう。したがって、スピノザのテキスト全般にわたって、二つの解釈にそれぞれ都合のよい文言を事細かに列挙したところで、論争に決着はつかない。どちらの立場に立つにしても必要なのは、一貫した解釈を提案することである。

カーリーは、一見して実体と属性との内属関係を示しているかにみえるテキストはすべて因果関係に読みかえることができるという。カーリーによれば、実体と様態との間に「事物と性質の区別」を読み取ろうとする内在論解釈はピエール・ベール『歴史批評事典』でのスピノザ評に由来する。ベールによれば、内属論解釈が正しいならば、神に矛盾した性質や「悪」など神にはふさわしくない性質が帰属することになる。このようにスピノザを論難するベールへの対抗策が因果論解釈であった。カーリーのベールに対する批判を、一言で表すならば、様態を性質と捉えるのは「誤った論理的カテゴリー」を様態に適用しているというものである (Curley 1969, 18)。

ベールの解釈に全面的に対抗するカーリーの武器は「モデル形而上学」と呼ばれる。その内容は、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』などからカーリーが示唆を受けて提示する一種の言語哲学といえるだろう。ごくかいつまんで要となる発想をまとめるならば、「モデル形而上学」とは思惟属性と観念に「命題」を割り当てそれらに対応する延長属性 (物理世界) と物的様態に世界で成り立っている「事実」を配分するという構図である (Curley 1969, 18)。

カーリーはこのモデル形而上学に依拠してスピノザのテキストを読み込むことで、因果論的解釈を打ち出していった。¹

カーリーの因果論的解釈とは、延長属性に限定するならば、以下のようなものとなる (Curley 1969, 55-74, Curley 1991, 48-49)。カーリーは、「能産的自然」たる実体と属性をもっとも基礎的で厳密に普遍的な事実すなわち「法則的事実 (nomological facts)」と読みかえる。延長属性は物体に関わる普遍的事実から構成されており、宇宙のもっとも一般的な構造であって、それはあらゆる物理的個物を支配する自然法則そのものである。同じ法則的事実に分類されるけれども、直接無限様態 (E1P21) と間接無限様態 (E1P22) は「所産的自然」を構成しつつ派生的な性格を有する。派生的というのは、直接的と間接的との相違はあるが、無限様態はもっとも基礎的な普遍的な事実すなわち属性の「絶対的本性から生じる」からである (E1P23)。最後に有限様態は、個別の物体それ自体ではなく、それらを含んだ単称的な事実となる。有限様態は、派生的な法則的事実が介在することはあるとしても、最終的にはもっとも基礎的な法則的事実すなわち実体から因果的に生み出されるのである。敷衍して言えば、「このPCが机の上に置かれている」という事実 (有限様態) はPCの内部構造や机の材質から万有引力の法則に至るすべてを統べるもっとも普遍的な自然法則によって因果的に生み出されているということである。後にカーリーが自説を簡潔に解説した一書の言葉を引くならば、スピノザは神と自然を同一視しているが「それは諸事物全体としてではなく、諸事物によって例化されたもっとも一般的な原理としての自然」なのである (Curley 1988, 42)。

カーリーが提案する因果論的解釈に従うならば、有限様態とそれに含まれている個物は、普遍的で必然的な自然法則によって因果的に決定され、そのように認識されねばならない。したがって、様態は実体の性質として実体を述語づける関係にあるのではなく、実体を原因に仰ぐ因果的な依存関係にある。それゆえ、『エチカ』に登場する内属論的解釈を示唆するように見える文言はみな因果関係を意味するものと解されねばならないのである。

以上の因果論的解釈をどのように評価すべきだろうか。因果論的解釈に共感するからといって、カーリーの読みに全面的に賛同するものは少ないかもしれない。本論でも解釈の当否について子細に検討はしない。確認しておきたいのは、因果論的解釈は、当人に自覚があるかどうかは不明ながら、多くのスピノザ研究者に事実上広く受け入れられてきたことである。一つだけ例を挙げておこう。フランスの研究者ゲルーは『エチカ』第一部と第二部にきわめて緻密な読解を提示し、現時点で広範な影響力をふるい続けている大著を著しているが、彼もまた暗黙のうちに因果論的解釈に与していると思われる。ゲルーは『エチカ』冒頭の実体と様態の定義を論じながら、「実体と様態といった伝統的概念の変形」がスピノザにおいて完成すると述べる。それは「自らのうちにある (in se) と他のものの中にある (in alio) の概念を因果性でもって翻訳すること」によって成し遂げられたというのである (Gueroult 1968, 60-65)。これは一例にすぎないかもしれない。だが、因果論的解釈が当たり前のように受け入れられてしまう根拠は、もの一般がさらには人間が神の性質であるとの主張に対して、誰もが感じる違和感を除去する試みであったことに存すると思われる。これこそが因果論的解釈の最大の強みであったのである。

2

カーリーの因果論的解釈が説得力を持つのは、様態を実体の内属する性質と考えることにきわ

めて強い違和感を多くの研究者が共通に感じているからであった。スピノザが内属を想起させざるをえない用語法でじっさいに語っているのはある種の因果関係である、とする因果論解釈を採用するならば、この違和感は解消される。しかし、この違和感はテキストの誤読に基づく根拠のないものかもしれない。もしそうであるならば、内属論解釈を支持するテキストを、因果関係を示唆するものと全面的に読みかえてしまう因果論解釈は、スピノザ理解として誤っていることになる。カーリーを批判する研究が一致して指摘する因果論的解釈の弱点はここにある。

現代の内属論解釈陣営は、大きく分けて二方向から、カーリーに対して批判を加えている。一つには、様態の実体への内属関係を因果関係に完全に置き換えてしまうテキストの読みは端的にスピノザを誤読している。もう一つには、内属という用語が因果性と完全に背馳するはずだという「違和感」は、誤解にすぎないというものである。以下順次見ておく。

すでに述べたように、因果論的解釈はもっぱら『エチカ』第一部定理16と系に依拠して、実体-様態関係を因果的関係と同一視する。直前の定理15などで述べられている様態の実体への内属を意味する文言はみな因果性の別様の表現とみなしている。だがカリエロによれば、定理15と定理16とはそれぞれ独立した別の論理構成であり、一方を他方に還元するカーリーの読みは恣意的にすぎる (Carriero 1995, 255-6)。メラメドは、カーリーには、カリエロの指摘をも含めて、12におよぶテキスト解釈上の難点があるという (Melamed 2013, 17-54)。たとえば、そもそも第一部定義5で様態は実体の「変様」であり「他のものうちにあり他のものによって考えられる」と定義されており、これは明らかに内属関係を意味すると思われる。もし、カーリーが正しいのならば、なぜスピノザはわざわざ誤解を招く言葉づかいをしているのかが不明である (Melamed 2013, 20-21)。

スピノザが用いる「内属」がスピノザ以前の伝統的用法から逸脱しているという「違和感」の正体もまた、中世哲学への誤解にすぎない。カリエロによれば、スピノザは中世アリストテレス主義に徹頭徹尾忠実に用語を選択している。カーリーは、有限な個物が神の性質あるいは偶有性であることと、神によって因果的に産出されていることとの間に緊張を見いだしているが、中世アリストテレス主義の伝統の下ではある事物が実体の性質であることと同じ実体が事物の作用原因であることとは両立可能であるというのである (Carriero 1995, 259)。したがって、内属論解釈に対するカーリーの直観的な疑念すなわち「実体に因果的に依存する個物が実体の性質とされるのはカテゴリーミステイクだ」という有名な断定は速断にすぎることになるだろう。

以上のカーリー批判の詳細を検証し、新たな内属論解釈の妥当性を吟味する余裕はないが、スピノザ研究者はいまや内属論解釈を真剣に受け止めなくてはならないのは明らかだと思われる。しかしながら、内属論解釈が因果論解釈を反駁しきるためには、スピノザ哲学における因果性に関して自説に適合的に論じることができなくてはならない。因果論解釈に一定程度の留保を求めるだけでなく、それにとって代わるテキスト解釈足りうるためには、なんらかの因果性理解を自説が備えていると宣明すべきであろう。

内在論解釈における因果性理解にはどのようなものがありうるだろうか。一つには、因果論解釈の方向を完全に逆転させて、内属関係が因果関係を含意しうるとの解釈がその候補となる。カリエロとナドラーからは、トマス・アクィナスのテキストを典拠としつつ、中世アリストテレス主義のターミノロジーにその可能性を探っている様子が窺える。たとえばカリエロによれ

ば、知性や感覚といった魂の能力は固有の偶有性であるが、それらは原因としての魂の本質から生じる (Carriero 1995, 259-260)。したがって、トマスのテキストに依拠しながら、内属関係が因果関係を含意しうる、かりに含意するとまでいえなくとも相互に対立するわけではないと考えることは十分に可能となる。スピノザが中世アリストテレス主義に忠実な言葉づかいで自らの形而上学を体系化しているのであれば、内属関係と因果関係を鋭く対立させているカーリーの前提はもはや維持できない。

より積極的に内属論解釈を選択すべき理由をナドラーが与えている。ナドラーによれば、スピノザの神が事物の内在的原因であることを適切に説明できるのは、因果論的解釈ではなく内属論解釈である。

「神はあらゆるものの、内在的原因であって超越的原因ではない」(E1P18)

この定理は定理16から直接導かれている。ナドラーは因果論解釈が依拠する定理から内在論解釈の妥当性を論証する。内在的原因とはその結果あるいは結果の一部が原因に帰属する原因であるのだから、自らのうちにあるなんらかの状態を生み出す原因である。これこそまさに内在論解釈によって実体-様態関係が読み解かれねばならない理由となる。内在関係そのものを否定する因果論解釈では、内在的原因を適切に扱いがたい。内属関係を完全に退けてしまうカーリーの路線では、この内在的因果性を十分に捉えることができないおそれがあるからである。しかも、原因と結果を不可分とする内在的原因に相当する因果性は、トマスのいう ‘*causa secundum esse*’ にみることができる。‘*causa secundum esse*’ とは、たとえば太陽が光と熱の原因である場合にいわれる因果性である。それに対して ‘*causa secundum fieri*’ は、建築作業において建築家が建物を建てるときの因果性である。前者にあつて原因 (太陽) の働きが継続してはと結果 (光と熱) は存在できないのに対して、後者では建てられてしまった建物 (結果) がその後も存続するために建築家 (原因) の働きは不要である。事実スピノザは、神は「ものが存在しはじめるため」の原因であるだけでなく「ものが存在に固執するための原因」であると述べ、わざわざスコラ学派の用語を借りて「ものの存在の原因」と言い換えている (E1P24C)。ナドラーが挙げる決定的な典拠は『エチカ』第二部定理10の系である。神は「生成に関する原因である (*causa secundum fieri*)」ばかりではなく「存在に関する (*secundum esse*)」原因でもあると、先の対比とまったく同じ言葉で神の因果性が語られているのである。これらから、ナドラーは『エチカ』での内在的原因は ‘*causa secundum esse*’ であり、それゆえ実体と属性の間には内属関係があると解釈すべきだと結論づける。しかもこの場合の内属とは、たんに性質が実体に内属することを意味するだけではなく、一種の因果性をも含みうるのである (Nadler 2008, 61-2)。²

以上のカリエロとナドラーの内属論の妥当性を検証するには、彼らが依拠するトマスのテキストを慎重に吟味する必要がある。たしかに、内属論解釈は内在的原因としてのスピノザの神を適切に論じることを可能にするかもしれない。だが、中世アリストテレス主義で論じられている因果性とスピノザのそれとの間にはやはり重大な切斷線が引かれている。それは自己原因 (*causa sui*) である (E1Def1)。

とくに注目したいのは「神は自己原因であるといわれる意味において、神はあらゆるものの原因であるといわれねばならない」(E1P25S) 事態である。この定理25と注解ならびに系は第

一部定理15と定理16を参照請求していることから、内属論解釈と因果論解釈とが交差するポイントの一つであることは明らかである。さらに興味深いのは、その系ではじめて個物を「神の属性の変様」と規定していることである (E1P25C)。スピノザは、実体の自己原因性と個物＝様態の因果的産出とを、内在と因果の両面から「同一の意味において」捉えようとしているのである。すなわち、因果論解釈に代えて内属論解釈を採用する場合においてもなお、実体＝様態関係という問題圏に属しているかぎりには、自己原因概念に光を当てなくてはならない。

果たして内属論解釈は自己原因を自らの枠組みに収めうるのだろうか。その見込みは低いように思われる。スコラ哲学の因果論において、自己原因は一種の矛盾概念であり思考不可能だったからである (マリオン1996、94-97)。カリエロが引くトマスも「本質による魂の能力産出は、自己原因性という歓迎されない事例ではない」次第を注意深く論じている (Carriero 1995、260)。もちろん、因果論解釈においても、それどころかいかなるアプローチにおいても、スピノザの自己原因概念は難問であり続けている。だが、中世哲学にとって自己原因が思考不可能であるとするならば、中世アリストテレス主義とスピノザとの概念上の連続性を強調するカリエロとナドラーの内属論解釈の方によりいっそうの困難が待ち受けているのは確かだと思われる。そして、この困難を克服する鍵が見つからないときには、因果関係を内属関係に包摂しようとする試みは価値を著しく減ずるはずである。

3

内属論解釈に立つ研究者のなかで、カーリーに匹敵するだけの体系的な代替案を提出しているのはベネットである。すでにベネットは「場の形而上学」と名付ける独特の実体＝様態論を、1980年代に提唱している (Bennett 1984, 81-110.)。最後にベネット版の内属論解釈を検討しておく。

ベネットによると延長属性下の実体は部分を持たない空間そのものとされる。ベネットを批判するカーリーの的確なまとめに従って紹介してみよう (Curley 1991)。ベネットによれば、唯一存在する空間はさまざまな質を帯びる領域をもち、通常対象とみなされているものはこれらの領域にほかならない。空間における「個別的な有限者、つまり物体は空間内の領域から論理的に構成されるもの」にほかならない (Curley 1991, 38)。それでは、このような構図の下では、空間内で知覚される物体の運動をどのように捉えるのだろうか。ベネットは物体は運動しないという。ここで物体は、「空間的かつ時間的な連続する一連の場所－時間」と結びつけられて論じられるのだが、それを理解するにはじっさいにあげられている例を参照するのが捷徑である。

「雪解けが田園地帯を横切っていくとき、いわばなにもものじっさいには運動しない。存在するのはただ連続的な変化であって、田園地帯の一部が凍りそして溶けていくのである。スピノザの見解はこれと類比的に考えることができる。すなわち事物あるいは物質の運動は、本当は質的なものの移動、つまりは適切な値FについてFである領域がFではない領域へと変化することなのである」 (Bennett 1984, 90)

春が来て雪に埋もれていた田園では徐々に地表が露わになっていく。ベネットによれば、スピノザのいう対象とは、雪に埋もれていた土地あるいは地表が露わになった土地のようなもので

ある。真に存在しているのは同じ田園の土地だけであって、その地面が氷結状態から解凍状態へと変化しているというのが実情だというわけである。「場の形而上学」においては、有限な事物あるいは具体的な対象は、空間の特定領域で生じる質的な変化を指示するために想定される質の担い手にすぎない。

ベネットの場の形而上学においては、カリエロらの内属論解釈とは異なって、因果性について特段の見解が組み込まれているわけではない。その点に触れたカーリーの批判に対して、ベネットは正面から答えかねている。スピノザが論理的依存関係と因果的依存関係を無頓着に同一視しているので、自説と調和する因果性理解を見いだすのは難しく、それはカーリーも同様だろうというだけである (Curley 1991, 48-49, Bennett 1991, 58-59)。

場の形而上学は、内属論解釈のもっとも洗練された理論である。カリエロらの内属論解釈は、先行するベネットを10年以上遅れて後追いつているかのようにもみえるほどである。ところが、ベネットの内属論には「無世界論」との嫌疑がかけられるだろう。スピノザの実体においては個別的なものはその自立性を喪失しており、実体の中で消滅していくのだから、存在するのは神=実体だけだというのがヘーゲルに典型的な「無世界論」である。ベネット自身は有限な事物の実在性を否定するような議論をしてはいないのだが、場の形而上学をベネットのスピノザ研究から独立して考察するならば、この疑いは真偽のほどを確かめる価値がある。というのも、場の形而上学では通常の有限な事物は端的に存在しないと主張されているかもしれないからである。

有限な個物について、場の形而上学での位置づけをどのように考えるべきだろうか。ベネットの主張は二種類の異なったテーゼと理解しうる。一方では、ベネットが主張しているのは存在論的なテーゼだとみなすことができる。存在論的テーゼに従うならば、有限な個物は文字通り存在しないことになる。これでは無世界論と断定されても無理はない。だが他方で、ベネットが語るのは、あくまでも有限な個物を認識する特定の分析手法なのかもしれない。この認識論的テーゼによれば、われわれが有限な個物についてなんらかの日常的な言明をなすときには、その言明は特定のアプローチの下で分析されねばならない。

この問題に取り組むために、現代分析形而上学の存在論において注目を集めつつある一元論の議論を補助線に引きたい。現代の一元論者シャファーは、一元論の哲学史的源流の一つにスピノザを挙げている。それ自体はごく常識に属する所作にすぎないが、特筆すべきなのはベネットのスピノザ論を「存在一元論 (Existence Monism)」(以下EMと略記する)に、カーリーのそれを「先行一元論 (Priority Monism)」(以下PMと略記する)にそれぞれ分類していることである (Schaffer 2012, 38-9)。以下現代分析形而上学における一元論のアウトラインを紹介したい。とくに存在一元論からベネットの内属論解釈を照射することで、場の形而上学における個物の地位を解明する契機を獲得したい。

シャファーの整理に従って、これら二つの一元論を紹介しよう。どちらの立場も、最広義の意味で宇宙を「存在する唯一の対象」とみなすという点で共通しており、それゆえともに一元論である。宇宙以外の対象の存在をどのように把握するか、という争点をめぐって分岐している。EMとは、存在する対象は唯一宇宙 (cosmos) だけであって、そのほかの多くの対象は存在するとはいえず、いわば幻影であると主張する一元論である。それに対してシャファー自身の立場であるPMによれば、基礎的な対象である宇宙は確かに唯一存在するのだが、そのほかの多くの対象もまた存在する。EMとの違いは、宇宙とは区別される多くの対象は基礎的な対象つ

まり宇宙に依存してのみ存在するとされる点に求められる。両者の違いをわれわれの日常経験に即して述べ直すならば、私の眼前にあるパソコンのディスプレイ、いまタイプしているキーボード、パソコンが置いてある机、私が座っている椅子等々が「存在している」と認めている一元論がPMであり、「本当は存在していない」とパソコンや机の存在を否定する一元論がEMである。

本稿の目的にとって注目すべきなのは、EMをベネットのスピノザ解釈が支持しているとシャファーが指摘していることである。シャファーが引用するのは、「スピノザが有限な個別者が様態であるというとき、……、スピノザが本当に言っているのは通常の個物は実在の存在するあり方 (ways that reality is) である」というベネットの言葉である (Schaffer 2007, 43-4, Bennett 1984, 92)。すなわち、場の形而上学という内属論解釈にあって、机やPCは存在しないということになる。

シャファーによれば現在EMを提唱するのはホーガンとポッチだけである。彼らがプロブジェクティズム (bobjectism) と名付けている存在論は以下の二つの存在論的で基礎的な主張とそれに付加的な認識論的主張から構成されている (Horgan & Potrc 2000)。

存在論的主張

- (1) ただ一つの具体的個別者 (particular) つまり宇宙全体が存在する。この宇宙全体をプロブジェクト (bobject) と呼ぶ。
- (2) プロブジェクトは純粋な部分をもたないが、広大な時空間上に構造化された複雑性と、広大なローカルの可変性をもつ。

認識論的主張

- (3) 常識と科学が指定する対象を用いた多くの言明は、常識と科学とが指定する対象に、直接的に対応するものが世界の側には存在しないとしてさえも、真である。
- (4) 上記のような言明における真理は、言語と世界に関して間接的に対応している (indirect language-world correspondence)。

プロブジェクティズムの存在論が正しいとすると、たとえば私がいま向かっている机は存在しない。世界は部分をまったくもたないゲル状の物質から成っているからである。したがって、机についての言明は常に偽となるはずである。「机」という名前が指示する対象が存在しないのだから。だが、ホーガンとポッチは、言語と世界に関して間接的に対応している枠組みとされる特殊な意味論を導入することで、机についての言明の真理性はなお確保されるという。この枠組みにおいて、机は茶色という性質が帰属する想定上の実在であり、それについての言明はゲル状世界のローカルな時空間的変異のさまざまなアスペクトを跡づけ (track)、記述するとされる。この枠組みは「操作的言語／世界対応説 (operative language/world correspondence)」とも呼ばれるが、それが間接的な対応説であるというのは次のような意味である。「さまざまな性質がどのようにゲル状世界内でローカルに例化されるか」を特定する仕事を「記述的／概念的枠組み」が担っており、この枠組みが指定する時空間上の点あるいは領域 (特定の度合いの透明度あるいは不透明度、特定の色合いなど) は枠組み自体が作り出す構成物であって「記述された世界の真部分ではない」のである (Horgan & Potrc 2000)。

ホーガンとポッチのプロプジェクティズムと独特の意味論をこれ以上紹介する必要はないだろう。上記のごく簡潔な紹介を読むだけでも、シャファーがベネットをEMに近いとみなした理由は明らかだと思われる。ベネットも認めるように、場の形而上学は『エチカ』で延長属性下の実体が有限な部分をもたない無限実体であるとする注解に触発されて構築された理論であり (E1P15S)、またそれを最適なテキスト上の典拠ともみなしている (Bennett 1984, 81-2)。実在するのはただ分割不可能な「自然全体 (the whole of nature)」だけであって、机やPCはその性質にすぎないというベネットの主張と、部分をもたないただ一つの宇宙 = プロプジェクトが実在するというプロプジェクティズムとは、その発想と着眼点を共有した一元論である。

だが、プロプジェクティズムは私たちの常識と折り合いを付ける認識論を装備している。これに対して、場の形而上学はその点が曖昧にとどまる。先述したように、場の形而上学は存在論的テーゼなのか、認識論的テーゼでもありうるのかが不明だからである。それゆえ場の形而上学は無世界論へと転落する危険性を秘めていた。だが、場の形而上学はスピノザ自然学のいわば「一階」をなすのであり、その上に量化可能な事物の世界を描写できる「二階」が建てられているかもしれない (Bennett 1991, 56-57)。そこから、場の形而上学の認識論的テーゼにふさわしい、有限な個物を認識するアプローチを現代分析形而上学の道具箱に探してみたい。

その有力候補は、EMと私たちの常識を折り合わせる手法、それもプロプジェクティズムとは異なる手法、「パラフレーズ」だと思われる (Schaffer 2007, 14, 柏端 2012, 42-43, van Inwagen 1990, 38-51)。たとえば、「テーブルがここにある」という言明は、EMにとって「厳密に言えば、世界はここがテーブル的である (tablish)」とパラフレーズされる (Schaffer 2007, 14)。もともとの言明は、机は存在しない以上、厳密には偽であるけれども、パラフレーズされた文の真理性を認めることによって真とされ、それゆえ机の存在についての「日常的な語りを真にすることができる」のである (柏端 2012, 42-43)。

じっさいにベネットは、空間Rに小石があるという言明を真とするのは、Rが「小石的 (pebby)」である事実だと述べている (Bennett 1996, 70-71)。私たちが小石として見ているものは、より十全に認識されるならば「小石的な (pebby)」特定の空間領域だという。私たちはこの空間の性質について、「一階の」場の形而上学から一段階段を上って「二階の」物理的な水準で、小石として概念化していることになる (Viljanen 2011, 160)。³ ベネットにおいてもまた、個物についての言明は、空間の性質についての文へとパラフレーズされていると考えてよいだろう。

そうであるならば、場の形而上学を現代版無世界論と特徴付けるのは失当であることが判明する。場の形而上学はたんに個物の存在を否定するだけの存在論的テーゼにとどまるのではなく、個物について正当に語りうる認識論的テーゼでもある。パラフレーズが本当に個別的な対象の「存在」を救い出せるかはなお検討の余地があるだろう (Schaffer 2007, 14)。しかし、すくなくとも、個物を実体の性質とみなすベネットの内属論解釈は私たちの個物認識を掬い取っているのは確かだと思われる。さらにいえば、個物に対する知覚の非十全性に虚偽の源を帰し (E2P31, P33)、理性的認識による克服を説くスピノザにふさわしい認識論を、ベネットの議論は予感させさえる。たとえば、個物の存在を自明視する私たちの知覚、あるいは知覚された存在をごく素朴に前提にする命題は偽であるけれども、その知覚に基づく命題を場の形而上学に裏打ちされた自然学の理論認識へといわばパラフレーズすることで、真の認識に変換しようというように。

おわりに

本論では、英語圏のスピノザ研究の一動向を調査してきた。その結果、スピノザ形而上学における実体－様態関係を内属論的に解釈する道が再び切り開かれたことが十分に確認されたと思われる。スピノザをスコラ哲学との連続的な論脈に置き直して再読するカリエロの業績は、もはや「ものが神の性質であるのは不可解である」との直感に訴えて内属論を拒絶することはできない事実を研究者に突きつけている。ナドラーがトマス ターミノロジーとスピノザの原因との共通性を強調して読み解いているように、内在論解釈の方が因果論解釈よりも神の内在的原因性を適切に論じることができるかもしれない。ベネットの場の形而上学は、有限な事物の認識にまつわる曖昧さを除去するならば、いまなお魅力をたたえていよう。

むろん、因果論解釈と内属論解釈のどちらがより正確なテキスト解釈なのかを決するにはさらなる分析が求められる。本論で紹介した内属論解釈には、それぞれに固有の課題もあった。また、検討の俎上にすら挙げられなかった重要な研究もある。⁴ いずれにしても、後日に期すことになるのだが、そのための準備作業に着手したことに満足して稿を閉じたい。

凡例

スピノザ『エチカ』からの引用は *Studia Spinozana* の citations convention に従う。
例：E1P12 = 第一部定理12

文献表

- Bennett, Jonathan. 1984. *A Study of Spinoza's Ethics*. Indianapolis : Hackett Publishing.
- . 1991 “Spinoza’s Monism : A Reply to Curley.” In *God and Nature : Spinoza’s Metaphysics*, edited by Yirmiyahu Yovel, pp. 53-60. Leiden : E.J. Brill.
- . 1996 “Spinoza’s Metaphysics” in *The Cambridge Companion to Spinoza*, edited by Don Garrett, pp. 61-88, New York : Cambridge University Press.
- Carriero, John. 1995. “On the Relationship between Mode and Substance in Spinoza’s Metaphysics.” *Journal of the History of Philosophy* 33 (1995) : pp. 245-73.
- Curley, Edwin. 1969. *Spinoza’s Metaphysics : An Essay in Interpretation*. Cambridge, Mass : Harvard University Press.
- . *Behind the Geometrical Method : A Reading of Spinoza’s Ethics*. Princeton : Princeton University Press, 1988.
- . 1991 “On Bennett’s Interpretation of Spinoza’s Monism.” In *God and Nature : Spinoza’s Metaphysics*, edited by Yirmiyahu Yovel, pp. 35-51. Leiden : E.J. Brill.
- Della Rocca, Michael. 2008. *Spinoza*. New York : Routledge.
- Guerot, Martial. *Spinoza I*. Vol. I : *Dieu*. Paris : Aubier-Montaigne, 1968.
- Horgan, Terence, and Potrz “Matjaz” 2000. “Blockjektivism and Indirect Correspondence.” *Facta Philosophica* 2 (2000) : 249-70. (次のurlで公開されているバージョンを用いている。http://www.u.arizona.edu/~thorgan/papers/eminee/BlockjektivismIndirectCorrespondence.htm. 2013年10月7日アクセス)
- Melamed, Yitzhak. 2013. *Spinoza’s Metaphysics*, Oxford : Oxford University Press.
- Nadler, Steven. 2008. “‘Whatever is, is in God’ : Substance and Things in Spinoza’s Metaphysics.” In *Interpreting Spinoza*, edited by Charles Huenemann, 53-70. New York : Cambridge University Press.
- Schaffer, Jonathan. 2007. “Monism.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- . 2012. “Monism : The Priority of the Whole.” in *Spinoza on Monism*, edited by Philipp Goff, Palgrave Macmillan, pp. 9-50.
- van Inwagen, Peter. 1990. *Material Beings*, Ithaca : Cornell University Press.
- Viljanen, Valtteri. 2011. *Spinoza’s Geometry of Power*, New York : Cambridge University Press.
- 柏端達也 2012 「一元論をめぐる現代の議論における若干の「カント的」な観念について」、日本カント協会『カントと形而上学』理想社、37-51頁。
- 木島泰三 2011 「現代形而上学から見たスピノザ」、スピノザ協会『スピノザーナ』12、123-141頁。
- ジャン＝リュック・マリオン 「類比と理由律との狭間に」松田克進訳、『思想』No. 869、91-115頁。

注

¹ 木島がモデル形而上学について詳しく解説している（木島 2011, 127）。ちなみに、木島はこの国で明確に内属論解釈をとる研究者である。

² ナドラーは注意深く内在的原因の意味が‘*causa secundum esse*’だけで尽くされるのではなく、「神が内在的原因であり、神によって因果的に産出されたすべてのものが神のうちにあるがゆえに、神の活動が‘*causa secundum esse*’だと帰結する」と述べている（Nadler 2008, 63）。

³ さらにヴィルヤネンは、空間を「空間的な力が構成する統一された場」と捉え直し、物理世界における個々の物体は空間的な力の変様として記述されうると議論を展開していく（Viljanen 2011, 161-2）。これは一つの有力な場の形而上学解釈であろう。

⁴ 二つだけ挙げておく。デラ・ロッカは内在的關係も因果的關係も認識論的依存関係であることには変わりはないのだから、両者を区別することは不要だとして、両者を同一の依存関係に還元する（Della Rocca 2008, 65-69）。

メラメドは、ものを性質の束と捉えるトロープ（*trope*）説、なかでもものと性質を截然と区別しないヴァージョンのトロープ説を参照して、それを有限様態に適用しようとする（Melamed 2013, 55-59）。